新しい日本文化論と日本語教育のためのマルチメディア・コンテンツ『夢を紡ぐ街 – 東京 – 』の研究開発[1]

西郡　仁朗

はじめに

従来の日本語教育では、日本の文化・社会等を「日本事情」として扱い、百科全書的な紹介が主流を占めていた。しかし、上級学習者の国内外での急増や、彼等や日本人自身からの「現代において日本的とはどういうことか」という問いへの対応として、グローバルかつ今日的視点からの新しい日本文化論さらに日本学が求められている。

同時に、語学教育という側面からは、上級学習者が、日本人とさらに円滑な人間関係を築くための言語運用（談話のストラテジーや非言語行動など）の研究と教育が求められている。

本研究開発は、東京で新しい文化的価値を創造する若手文化人の紹介を通じてこうした課題に対応しようとするものであり、同時にインターネットとマルチメディアの援用により本学を初めとする留学生への日本と日本語の学習支援を探求するものである。また、現代日本における新しい文化的価値の考究や談話分析の教育利用により、日本人学生の教養教育への応用も可能であるものを目指した。

教材制作の流れと分析の観点

本研究では、ＣＡＬＬ兼ＷＢＴ教材「夢を紡ぐ街 – 東京 – 」の研究開発を行った。制作に当たっては、日本語教育学・日本文化論・談話分析・教育メディア論などの知見を生かした内容となるよう、図-1 の流れで制作を行うこととした。

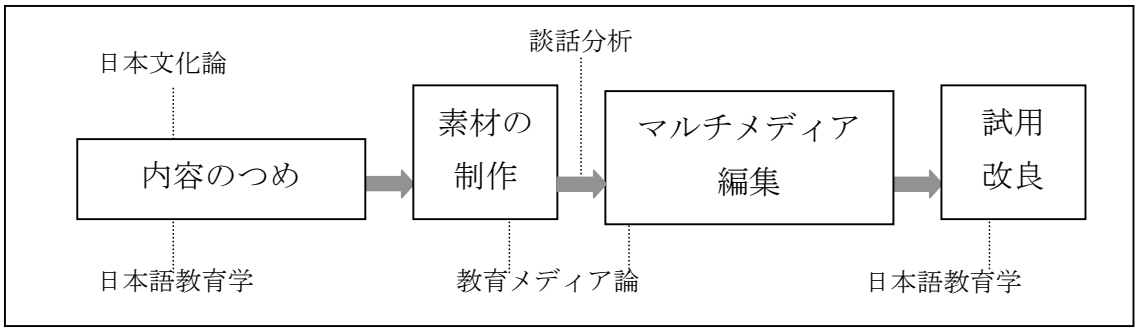

図-1 教材制作の流れ

[1] 本教材の制作に当たっては、平成１５年度東京都立大学総長特別研究費の助成も受けている。

インタビューの内容は、日本文化論・日本語教育学的見地からの検討の上、対象者との打ち合わせを数度行って、どのような内容を語るかは事前に決めていた。ただ、厳密な台詞決めは行わず、ある程度は自然な言い回しと展開を認めて、収録を行った。

インタビュー収録後、その内容を分析し教育工学的な配慮のもとでマルチメディア編集を行ったが、その際、分析の観点として

1. 新しい文化価値の創造から現代日本を考察する
2. 現代人の自然談話を通じて言語運用に関する学習を支援する
3. 地域社会東京の実態を紹介する

の三つを定め、学習者に必要な情報を動画およびスクリプトとヒントという形で提供することとなった。

動画の概要

動画の内容は、インタビュー対象の活動内容・経歴・考えを引き出したものと、彼らが活動している地域の紹介からなる。

前者については以下のようなユニットがある。

1. メテオール：音楽とコンピューターグラフィックスの融合

   音楽と映像の両者を表現手段としているグループ「メテオール」の中心人物２名へのインタビューを通じ、現代日本のポップカルチャーの紹介と、その担い手の経歴や考え方を伝えている。外国人日本語学習者の中には、日本のポップカルチャーに興味を持ったのがきっかけとなって日本語の学習を始めた人々も少なくない。こうした学習者への情報提供という意味合いもある。また、東京の若い人々の話しことばの特徴についても、インタビューでの言葉遣いをもとに説明を加えている。

2. 柳家小太郎：古典落語のホープ

   若手の古典落語家へのインタビューを通じ、古典文化を守っている人の経歴や考え方や、現代文化の中での落語の状況を伝えている。日本の古典文化に興味を持っている外国人日本語学習者にとって有効な動機付けとなるように、内容が構成されている。また、古くからの江戸ことばと現代の東京の話しことばの異同についても解説している。

3. 落合千春：アニメキャラクターの著作権管理

   アニメーションなどのキャラクターの制作と著作権管理、商品化をめぐるさまざ

まな問題などが、実際にキャラクターを管理している立場から伝えられる。外国人日本語学習者の中には、日本のアニメーションに対する興味が日本語の学習のきっかけとなった人々も少なくない。こうした学習者への情報提供と動機付けという意味合いもあり、また、アニメキャラクターの著作権などは、現代社会でしばしば問題となる分野でもあるので、この内容が選ばれた。

4. 渡辺樹庵：ラーメンコンサルタント

ラーメンは現代日本人が最も好む食べ物の一つになっている。また、もともと中国の料理であったものが日本で独自の変化を遂げた点が、日本の文化特徴の一面を反映している。ラーメンコンサルタントという新しい職業の人物へのインタビューを通じ、新しい職業を切り開いてきた経緯、さらに日本人の食生活や、マスメディアとインターネットの影響力などを紹介している。

東京の地域紹介については以下のようなユニットがあり、上記の人々が自分の活動する地域を紹介する形式となっている。これらの地域はどちらかというと「マイナー」であろう。東京の「地域」紹介というと銀座・新宿・渋谷・皇居周辺・丸の内オフィス街などが思い浮かぶ。しかし、こうした「メジャー」な地域は他の教材で繰り返し紹介されているので[2]、本教材ではメジャーかマイナーかにはこだわらず、文化人の活動地域ということに主に焦点を当てた。

5. 日暮里

メテオールの活動地域である。谷中に代表される江戸時代の面影を強く残す部分と、繊維街などの新・商業地区としての部分という二面性が特に強調されている。

6. 上野

柳家小太郎が出演する演芸場のある街で、博物館・美術館が建ち並ぶ文化的な面と、アメヤ横町などの庶民性を紹介している。

7. 代々木

落合千春のオフィスがある。駅周辺は予備校・専門学校が多く若者の街である点、東京オリンピックの主会場となった競技場・体育館がある点、代々木公園は都民の憩いの場である点、初詣の人手が最も多い明治神宮が近くにある点などの多面性が

---

[2] マルチメディア教材としては『日本語教育用写真パネルバンク CD-ROM 版』（国際交流基金,2000）などが挙げられる。

紹介されている。

8. 高田馬場

渡辺樹庵の直営店がある。早稲田大学の学生などで賑わう若い人の街であると同時に、外国人が多い国際色豊かな街でもある。また、ここに昔から住んでいる人々の思いなども紹介している。

バーチャル合成

地域の紹介を臨場感あふれたものとするため、背景動画を別途撮影し、スタジオで地域紹介を行う人物の映像を合成するバーチャル合成を行った。この合成には特別の設備が必要であったが、京都大学学術情報メディアセンターの協力を得て、実現できた。出演者へのインタビューは、すべて同センターのバーチャル・スタジオで行われた。

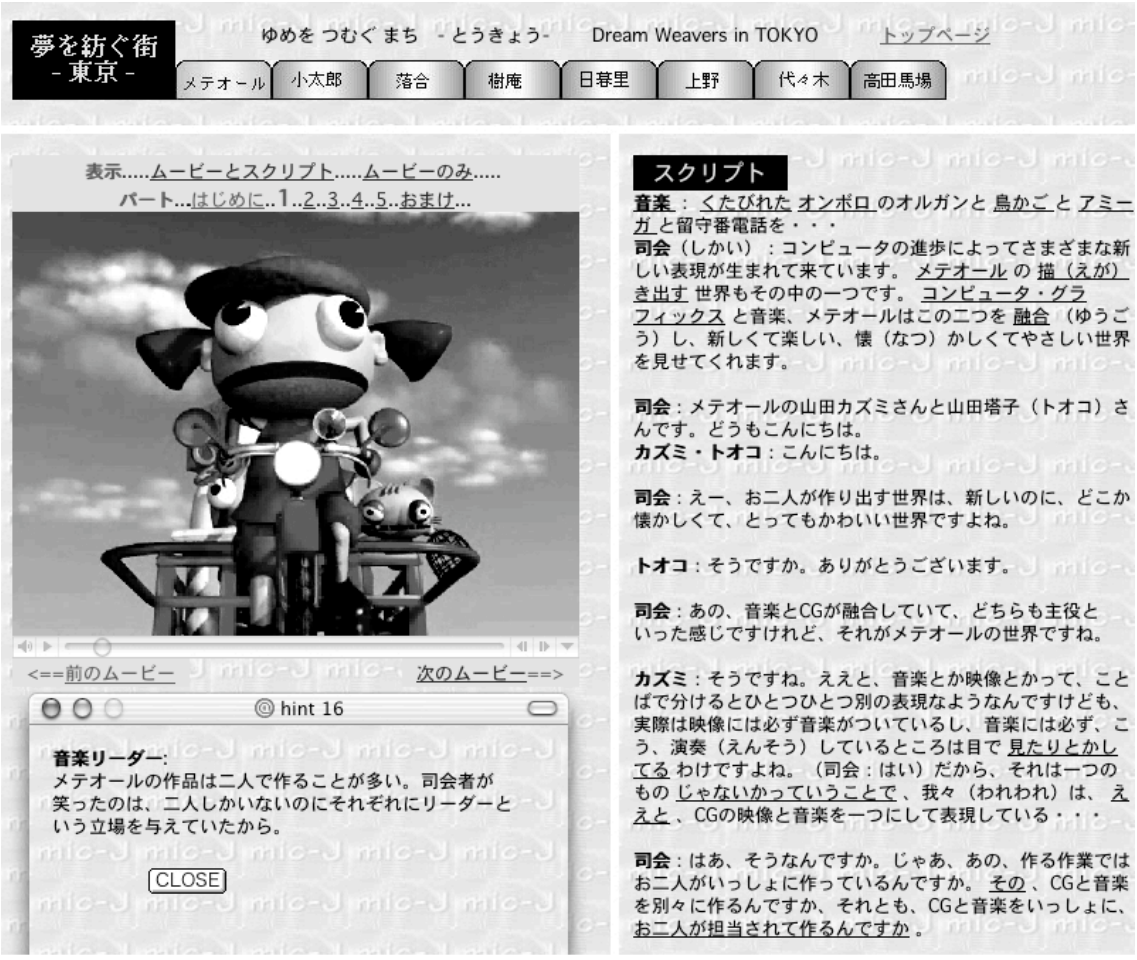

図-2. 『夢を紡ぐ街 – 東京 - 』の画面例

動画編集とプログラミング

動画の編集は Adobe 社の Premiere 6.5、音声の編集は Premiere 6.5 に加え Macromedia 社の SoundEdit16 を用いて行った。動画のファイル形式は QuickTime ムービーで、圧縮には Sorensen 3 が用いられている。動画のファイル形式にはいくつか他の候補が挙がったが（MPEG, WMV, Real など)、今回の教材は、動画を WEB ブラウザのウィンドウ内で見ることを前提としており、スクリプトやヒントのフレームを動画と同時に示す必要があった（図-2 参照)。そのため、動画部分の大きさを 400×300 ピクセル程度にしなければならなかったので[3]、画面の大きさの設定が比較的自由にでき、動画コントローラのデザインが単純な QuickTime を採用することとした。利用者には QuickTimePlayer5.0 以上をインストールしておくことが求められる。

教材化する際の言語は HTML 及び JavaScript で作成し、一般のブラウザがあればどこでも利用できるものとした。このプログラミングに当たっては、Macromedia 社 DreamWeaver を部分的に使用している。

スクリプトとヒント

本教材は日本語上級以上の学習者を対象としているが、インタビューの内容には語彙・話しことば独特の言い回し・談話構造・文化背景など、上級者にも理解が困難な要素が数多く含まれている。パソコンの画面上に、スクリプトとヒントを表示することで学習者の便宜を図ることとした（図-2 参照)。スクリプトとヒントを作成するに当たっては以下の基準を設けた。

1. スクリプトでは、対話の音声をできるだけ忠実に再現し、言いよどみやフィラーなども表記する。
2. スクリプトとヒントの文字表記は漢字仮名混じり文とする。常用漢字の範囲で、漢字を使用するが、日本語能力試験『出題基準』で１級、２級及び級外とされる漢字または語彙については読み仮名をつける。
3. 次の場合にヒントを付する。
   3-1. 日本語能力試験『出題基準』で級外とされる語彙
   3-2. 話しことば特有の縮約や言い回し、言い間違い
   3-3. 固有名詞で説明が必要だと思われるもの

---

[3]動画画面はできるだけ大きい方が望ましいが、スクリプトとヒントの画面を明確に示すためには、こちらにもある程度の面積が必要である。動画の画面を 400×300 ピクセルとしたのは、こうした諸条件を満たすために試行錯誤を行った結果である。

3-4.談話構造上説明が必要だと思われるもの

4. ヒントは一つのユニットで初出の場合にだけ示す。別のユニットでヒントが出された項目であっても、そのユニットで初出であればヒントを示す。
5. ヒントの記述は原則として日本語能力試験『出題基準』で１級以下の語彙による。もし、この範囲を超える語彙がどうしても必要な場合は、註を付して１級以下の語彙で、さらに説明を加える。

以上のスクリプトとヒントの作成に当たっては、読解支援サイト『リーディングちゅう太[4]』の「レベル判定ツール」を利用した。また、ヒントの内容については三省堂『例解新国語辞典』を参考にした。

スクリプトとヒントについて、本報告集の西郡・篠崎(2004)を参照されたい。

モニターと改良

動画の内容自体は大きな変更ができないものであるが、微調整や有効なヒント作成などのために、日本人学生、留学生に動画内容のモニターを依頼し、疑問点や不明瞭な音声を指摘してもらって、動画・音声編集とヒント作成に生かすこととした[5]。

おわりに

本教材の内容検討と発展については、今後の使用（自学自習および授業）が必要である。現在、本教材は、本学のサーバーの中にデータがあり、ＬＡＮの中からは円滑にアクセスできるが外部からだと相当に時間がかかる場合が多い。そのために、この教材を、提携先機関についてはそこのサーバーにインストールし、また、それ以外の国内外の研究教育機関についてもDVD-ROMを制作して配布することとなっている。

内容的な面について、現在までにあがっている要望は、教材のシリーズ化である。一つ一つのユニットは完結していて、日本文化論と上級日本語の学習に資することはできるが、ポップカルチャーやサブカルチャー的な内容となっているため、わずか８ユニットでは、現在の日本文化や東京という地域の一面しか紹介できず、誤解が生ずる可能性がある。数多くのユニットを作成することで、現代日本、特に東京の文化についての全体像が描けるようなものにする必要があるだろう。

---

[4] 東京国際大学川村よし子氏などによる。http://language.tiu.ac.jp/

[5] 平成１５年度東京都立大学教養部「日本語 IIｄ」人文学部「日本語教育学演習」大学院人文科学研究科「日本語教育学特殊研究」の受講者が協力してくれた。記して感謝する。また、音声については聞き取りにくい発音の修正やフィラーが過剰に出ていて聞きにくい場合の音声削除を部分的に行っている。

制作スタッフ及び協力者

東京都立大学人文学部　mic-J：　西郡仁朗　篠崎晃一　尾崎和香子　石澤文
大橋愛子　志賀響子

京都大学学術情報メディアセンター：壇辻正剛　坪田康　河上志貴子　清水政明
津志本陽　川口亘代　福島丈司

司会：武蔵祐子（早稲田大学大学院）

協力：(敬称略，50 音順)　池袋演芸場　（株）コミックス・ウェーブ
佐藤健（東京都産業労働局）　酒井たか子（筑波大学）鈴本演芸場
高田馬場銀座商店街振興組合　邦楽ジャーナル倶楽部"和音"
柳家さん喬

引用文献

国際交流基金・日本国際教育協会(2002)『日本語能力試験・出題基準（改訂版)』

国際交流基金(2000)『日本語教育用写真パネルバンク CD-ROM 版』日本出版貿易刊

西郡仁朗・篠崎晃一(2004)「新しい日本文化論と日本語教育のためのマルチメディア・コンテンツ『夢を紡ぐ街 – 東京 -』スクリプトとヒント」本報告集